

2012年,開学25周年を新たな改革のスタートに

金沢学院大学 学長
梶木 裕



つきのき・ゆたか氏

1949年生まれ
1971年 金沢大学法文学部文学科卒業
1976年 京都大学大学院文学研究科修士課程修了(文学修士)
1978年 金沢女子短期大学 講師
1984年 金沢女子短期大学 助教授
1987年 金沢女子大学文学部 助教授
1991年 金沢女子大学文学部 教授
2004年 金沢学院大学文学部国際文化学科長
2006年 学校法人金沢学院評議員
2007年 金沢学院大学文学部長
2010年 金沢学院大学学長, 金沢学院短期大学学長
(いずれも現職)
学校法人金沢学院理事(現職)

昨年11月下旬にトランポリン部の大学院生が今年のロンドンオリンピック出場を決めました。凱旋バスから降りた選手を囲んで祝福の挨拶をしたときはさすがに感激しました。本学ではさらにウエイトリフティング、水泳高飛び込みなどで学生、職員が出場する可能性があります。前回の北京大会には学生、職員合わせて3人が出場しました。このようにオリンピック選手を連続して輩出していること、さらに昨年春にはスポーツ健康学部を新設したこともあり、地元では「スポーツに強い大学」と見られているようです。企業からは学生に対して「礼儀正しい」「粘り強い」「元気がある」という評価もいただいています。

けれども本学の長は、きめ細かい学修支援体制にあると思っています。ですから基本的なスタディスキルを身につける「初年次教育」、コミュニケーション能力などの人間力を養う「社会人育成教育」、1～2年次に行う少人数の「プレゼミ」「教養ゼミ」などにはとりわけ力を入れてきました。この教育のベースにあるのが6年前の学園創立60周年を機に策定した新しい教育理念「創造」です。教育理念には3つの指標があり、地域社会への貢献や実践力の育成などをうたっています。

それ以前は、1946年(昭和21)の学園創立時に掲げた建学の精神「愛と理性」をずっと教育の指針としていました。1950年(昭和25)に金沢女子短期大学となり、1987年(昭和62)に金沢女子大学を開設してからも、人間性の発展と文化の向上に貢献するという女子高等教育の理念は不変でした。

「こんなはずじゃない」ムードの一掃を目指す

しかし、1995年(平成7)に「金沢学院大学」と名称を変えて共学化し、3年後に短大も共学化に踏み切ったのを機に、すべての教職員が参加して将来を展望する新しい教育理念を策定したわけです。

スポーツ健康学部の開設により、4学部8学科を擁

する北陸随一の私立文科系総合大学として地域の皆さんに認知される半面、大学が林立する金沢にあって年々学生募集の厳しさが増しているという現実があります。「こんなはずじゃない」「でも何とかなるだろう…」。そんな空気がここ数年、教職員に蔓延していたように感じます。大学そのものを変え、このムードを一掃することが私の重要な役割だと思っています。

そこで、就任して間もなくの昨年、まず奨学金制度を見直し「アドミッション奨学生制度」を設けました。アドミッションポリシーに基づいて、大学入試センター試験、一般入試のみならず、推薦入試からも向上心にあふれた特色ある学生を選抜。入学後も奨学生として学業成績は相応か、キャリア講座や資格取得に積極的かなどをポイント制で審査し、「不適」と判定された場合は他の優秀な学生と入れ替えます。

ところが、この制度がきちんと運営されるには、キャリア講座を課外に設け、リメディアル教育も施して、学生のやる気を引き出さねばなりません。しかし、なかなかうまくいかない。それで今、教員の都合を最優先して作られてきた時間割の根本的改訂を進めています。この種の作業は一つ変えればそれで終わりというものでなく、波及するところも変えていかないと改革にならない。はじめはなかなか見通せませんから、粘り強く取り組んだり、主張したりして、同調者を作れるだけ多くすることが大切だと気づきました。

改革検討懇談会で教職員が危機感を共有

そこで、昨年秋、改革検討懇談会を立ち上げました。執行部に学部長、若手教職員を交えた27人の会議で、これまでこういう形式のプロジェクトはありませんでしたが、広く課題を洗い出し、共有し、優先順位をつけていく場としてどうしても必要だと考えました。ここでは、若手メンバーの意見を聞きだし、また私の考えも伝え、メンバーに改革の推進役、あるいはメンバー以外の教職員とのパイプ役を果たすことを期待しています。改革への意識を高め、意思決定のスピードを上

げることが、学長の果たすべき大きな役割だからであります。

実は本学はこれまでも、初年次教育や資格取得時の奨学金制度など、いくつも先行的な企てに取り組んできました。しかし、それらの間に連絡がなく、総合的な強みにならなかった。教育的、経営的な弱点があったとすれば、この点かもしれません。だから今後は、有機的な関連性を重視し、ねらいどおりに実行して成果をあげていくような体制に変えていかなければならないと考えています。

私の理想は、高校までに花開かなかった若者でも、本学で学ぶ4年間で十分に変わる、そんなインパクト、モチベーションを与え続ける大学になることです。幅広い教養を身につけるなかで社会的な問題に関心を持ち、自分の意見をきちんと主張でき、なおかつ他者の考え方を吸収しながら自らを成長させることができる。そのような人物を大勢育て、社会に順次送り出すことができたら、教育理念「創造」は実を上げたといえるでしょう。その点で今後、最も期待したいのはやはり教員の皆さんです。

30代、40代の先生方には大いに研究を進める一方で、教育にも研究活動以上に力を注いでほしい。50代以上の先生方には、教育面や大学運営の面での貢献をさらに強く求めたいと思います。私を含め、大学の教員には研究者としての矜持があります。そう簡単に研究より教育、と頭が切り替わらないことは一応理解できます。しかし、社会人として必要な基本的な能力を養成するのが本学の一番の使命だということを肝に銘じてもらう必要があります。むろん、職員にもそのような危機感と使命感を共有してもらわないといけません。

2012年(平成24)は、大学開学25周年の節目です。そこを新たな改革のスタートと位置づけ、30周年には一段と発展した大学になっていることを目指し、教職員一丸となって邁進してゆく所存です。 ■